

アジアにおけるリンガ・フランカとしての英語

小林 潔司

英語を母国語とする人口は意外に少ない。中国語、スペイン語、まもなくアラビア語を母国語とする人口の方が英語を母国語とする人口より多くなる。しかし、英語を第 2 外国語とする人口は圧倒的に多く、世界人口の 33% が英語を母国語と同様に話せるという。

アジア地域には、英語を母国語とする国はない。もちろん、ブルネイ、インド、マレーシア、シンガポール、フィリピン、香港では、英語が普通に通用するが、これらの国々の人々が、英語が母国語と考えているわけではない。それにも関わらず、英語がアジア諸国の共通言語として定着しつつある。

2009 年 2 月に批准された ASEAN Charter の Article 34 に、“The working language of ASEAN shall be English” とある。“shall” という強制的要請がある。

2015 年 12 月に AEC (アセアン経済共同体: ASEAN Economic Community) が設立された。AEC は、ASEAN (東南アジア諸国連合: Association of South - East Asian Nations) 加盟 10 ヶ国で構成される経済共同体であり、その目的は、ASEAN の枠組みのなかで、ヒト・モノ・カネの動きを自由化させることにあり、域内の物品関税が 9 割超の品目数で、既にゼロとなるなど高水準のモノの自由化を達成し、活発な経済交流が期待されている。AEC は通貨統合を実施したり、域外に共通関税を課す関税同盟になることを想定していない。むしろ、FTA (自由貿易協定) に投資の自由化や熟練労働者に限定した人の移動の自由化を加えた「FTA プラス」と解釈したほうがいい。

未熟練労働者の自由な地域内の移動は認めていないが、熟練労働者かどうかを判定することは実質的に困難であるため、結局は、AEC 内における大学入学、卒業後の就職に関して AEC 内の移動に関する制約が緩和されることを意味する。

AEC の設立により、英語が AEC の公用語となったため、AEC 内の大学における英語教育が強化された。AEC 内で、およそ大学卒業生であれば、英語を自由に話せると思ってい

言語学では、言語を分類するために屈折語・孤立語・膠着語という言語類型を設けている。屈折語はインド＝アリア語族に見られる特徴を持ち、語そのものが変化して時制や態・格を示す。文法により状況が整理されるためコンテキストに依存しない。孤立語の代表が中国語で、語尾変化がない。コミュニケーションのプロセスを通じて、当事者間でコンテキストが共有されていく。日本語は膠着語に分類される。名詞や動詞に助詞が付加されて、それが文章中の役割を示している。日本語は基本的に主語を持たず、中国語と同様にコミュニケーションの中で当事者達が互いにコンテキストを共有していく。但し、中国語と日本語では、コンテキストの読み取り方が異なる。中国語ではコミュニケーション

の関係を読み取る必要があるが、日本語の場合は会話の主体関係を読み取る必要がある。日本人も中国人も、それぞれ自国社会における文化的・社会的コンテキストを共有している。このため、同じコンテキストを共有する人間同士の間では、コミュニケーションの背景にあるコンテキストを理解する能力にたけている。しかしながら、日本語、中国語ともに、コンテキスト依存性の高い言語である。文化的・社会的コンテキストが異なる日本人と中国人の間の相互コミュニケーションは容易ではない。世界でもっとも多くの人間が母国語として使っている言語は中国語であるが、中国語ではコンテキスト依存性が大きいいため、世界共通語とはなりにくい。第 2 外国語として、もっとも多くの人間が使っている言語は、コンテキスト性の低い英語である。

アジアでは極めて多くの言語が使われているが、その多くは高度にコンテキストに依存している。アジア人同士がコミュニケーションを行う場合、かりにその中の一人が相手の言語を習得したとしても、社会的・文化的コンテキストを理解している保証はないため、コミュニケーションの過程の中で多くの誤解が発生する可能性がある。そこで、一度低コンテキスト言語である英語に翻訳することにより、互いに自分が前提とする暗黙のコンテキストを明示的に言葉として表現することとなり、理解を促進する上で効果的となる。また、ミスコミュニケーションは発生する可能性をできるだけ少なくすることができる。そのような意味において、アジア地域で英語を用いてコミュニケーションを行う意義がそこにある。アジア地域では、まさに英語はリンガ・フランカである。

リンガ・フランカ (Lingua franca) は、「フランク語」、「フランク王国の言葉」を意味するイタリア語に由来し、それから転じて、共通の母語を持たない集団内において意思疎通に使われている言語を指すようになった。現在では、「共通語」や「通商語」の意味で使われることが多い。英語は単なる外国語ではなく、コンテキストに高度に依存する会話の内容を、低コンテキスト化することにより、相互コミュニケーションを容易にするための手段、すなわちリンガ・フランカである。英語が単なる外国語である時代に終わったのかもしれない。

一方で、フィリピンの Taglish、シンガポールの Singlish 等、アジア各国で用いられる英語は極めて多様である。アジア各国で活動を始めると、ローカル英語の多彩さに驚かされることが多い。しかし、AEC 各国の教育の現場において、ローカル英語を教える教育機関はほとんどない。実際、各国の教育機関で教える英語は L1 English、すなわち アングロイングリッシュである。公文書や契約において使われる英語は、すべて L1 English である。しかしながら、研究やビジネスにおけるコミュニケーションで用いられる英語はローカル英語である。

前述したように、アジアの国々で使われているオリジナルな言語は、それぞれコンテキスト依存적である。このようなオリジナル言語のコンテキスト依存性を反映して、アジアの国々で用いられる英語にも、それぞれの国々におけるコンテキストの残滓が介入してくる。このようなコンテキストの残滓が、それぞれの国に特有なローカル英語を作り上げるのである。日本人の英語は、日本人のアイデンティティの在り方を反映し、外国人には理解しにくい On-Stage 英語になることを紹介した（ハイコンテキスト社会としての日本、土木学会長情報プロジェクト（2018.07.09））。前述したように、日本語は「てにをは」という助詞を用いて文脈を構築する膠着語である。つまり、「てにをは」は、文脈を構成するためのテンプレートである。日本人が英語を話す場合も、「てにをは」によるテンプレートを用いて、英語の文章を構成する。たとえば、「(私は) 車で〇〇に行く」という意思を、「I drive to 〇〇」とは、なかなか言えない。多くの場合、「I go to 〇〇 by car」と言ってしまう。ことほど左様に、日本人の発想法やコミュニケーションをとりまくさまざまなコンテキストが日本人の話す英語発言の中に混入する。研究であれビジネスであれ、実際のコミュニケーションではローカル英語が用いられる。不必要な多様化を避けるために L1 教育は必要だが、ビジネス・研究コミュニケーションを実施するためには、単なる英語力だけではなく、ローカル英語を用いたコミュニケーション能力を高めることも不可欠である。

日本人が英語によるコミュニケーションを行う場合、日本的社会のコンテキストの中に埋もれたメッセージを英語によるコンテンツに翻訳することが必要となる。このような翻訳過程は、日本語のコンテキストを解体する過程（脱構築）と英語によるコンテンツに組み立てなおす作業（再構築）により構成される。アジア人同士が英語を用いて会話をするとき、お互いがこのような脱構築—再構築という翻訳過程を常に動かしている。しかも、翻訳過程は瞬時に実施される。したがって、英語によるコミュニケーションの中に、どうしても話し手や聞き手のコンテキストの残滓が介入してくる。コミュニケーションを実施するとき、相互理解のために、英語に翻訳されたメッセージというコンテンツだけでなく、身振りや手ぶり、おもてなしやコミュニケーションが実施される場の環境といった非言語的要素も動員されることになる。実際、異なった文化的背景を有する人間同士が、互いに、相手の人間や組織をとりまく文化的・社会的コンテキストを完全に理解することは不可能である。ここに、異文化コミュニケーションの難しさが存在する。しかし、互いに高コンテキスト社会に属するアジア人同士がコミュニケーションするとき、互いに非言語的要素も含めた総合的なコミュニケーション努力を行っていることを、相互に理解していることも事実である。アジア人とコミュニケーションを行う欧米人は、相手のアジア人がこのような翻訳過程を行っていることに気づかない。しかし、互いに相手のコンテキストを尊重し、理解しようと努めながら、ともに新しい価値の創造をめざして努力することによって、価値共創をめざした異文化コミュニケーションは可能である。